転倒のリスク管理について
『Aさんを通して』

新潟県障害者リハビリテーションセンター
支援員　大久保　美菜子

はじめに

　入所当初から転倒を繰り返す利用者に対して危険意識を促し、環境調整を試みたが、大きな変化にはつながらなかった。今回、症例報告を通して、転倒に対するリスク管理の取り組みについて発表する。

症例紹介

Aさん　20歳　女性

診断名：びまん性軸策脳損傷後遺症

（平成16年　交通事故により発症）

障　害　：痙性四肢麻痺

動眼神経麻痺

高次脳機能障害

ADL　：入浴以外は自立

歩行は独歩であるが不安定

転倒の回数　1日2～3回

（モチベーションに影響される）

障害特性

- 右眼に視野狭窄があり視野修正のため
  首が左を向きやすい
  姿勢が右に傾く
- 歩行時に左足がすり足になる
- 精神発達遅滞

転倒報告１

転倒しやすい状況

- 二つの動作を同時にする時
- 床の物を拾う時
- 下膳時

→周囲に注意を向けらず、危険を避けられない

【対応】
①保護帽を被る
②入浴の見守り
③歩行時の注意事項の確認
④下膳の順番を確認する

転倒報告２

- 居室で物を拾おうとした際、バランスを崩して同室者に覆い被さるように転倒する。
- 本　人：外傷なし

  同室者：左第8肋骨骨折

【対応】

- 居室を個室へ変更し、

  マットを敷き転倒の衝撃吸収

結果

①自分自身の転倒についての意識が芽生えたが、転倒の減少にはつながらなかった。

②転倒時の怪我の予防につながった。

まとめ

　今回の取り組みを通して、転倒が本人だけでなく、他者を巻き込むリスクがあり、他者にも被害が及ぶということが分かった。

　本人への意識付けはもちろんだが、2次的な被害を考慮した環境設定をすることが必要と思われる。